The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	韓国語を母語とする日本語学習者における二字漢字語の認知処理 : 日本語の語彙知識及び L1 による影響に着目して
Author(s)	李, 煥然
Citation	日本語・日本文化研究. 2023, 33, p. 99-113
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95378
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

韓国語を母語とする日本語学習者における二字漢字語の認知処理
―日本語の語彙知識及び L1 による影響に着目して―

李　煥然

1. はじめに

日本語と韓国語の間では、「運動」や「無料」など、漢字二文字で構成される同形同義の二字漢字語が多く共有されている(남기탁, 2015)。また、これらの二字漢字語は音韻的・統語的な類似性が高い(朴・熊・玉岡, 2014)ため、韓国語を母語とする話者は、母語で漢字表記を使用しないものの、日本語における二字漢字語を習得するという点においては、英語やフランス語など漢字語が含まれない言語を母語とする学習者に比べて有利であると思われる。そこで、本研究では、韓国語を母語とする日本語学習者が語彙性判断課題において、どのくらい効率的(迅速かつ正確)に日本語の二字漢字語を処理できるかを測定し、その日本語の語彙知識と L1 韓国語による影響に着目して考察を行う。

2. 研究の背景

2.1. 二字漢字語の処理における日本語の語彙知識による影響

日本語学習者は L2 として日本語の二字漢字語を処理する際、処理の効率性が日本語の語彙知識から影響を受けることが先行研究で報告されている(e.g. 陳, 2015；大和・玉岡, 2009)。その中でも、韓国語を母語とする日本語学習者を対象とした研究として、松島(2013, 2014b)が挙げられる。松島(2013, 2014b)では、韓国語を母語とする日本語学習者を対象に、日本語の漢字テストと語彙テストの成績に基づいて習熟度の高い上位群と習熟度の低い下位群に分け、それぞれ命名課題と語彙性判断課題を用いてその二字漢字語の処理過程を検討した結果、命名課題においても語彙性判断課題においても、上位群が下位群より処理に要する反応時間が短く、誤答率が低いことが報告されている。

しかし、松島(2013, 2014b)は、視覚提示による実験を用いており、刺激によって活性化[1)]された書字表象に基づいた視覚的な処理を調べるものであった。音声刺激に基づいて音韻表象が先に活性化され、視覚的な処理との処理経路が異なると考えられる聴覚的な処理において、日本語の語彙知識による影響は同様の傾向が認められるかについては、未だに検討がなされていないようである。この点について、本研究では視覚・聴覚提示両方による実験を通して明らかにする。

2.2. 二字漢字語の処理における L1 による影響

日本語の二字漢字語の中には、中国語及び韓国語との間で類似した書字や意味、または音韻を共有する同根語(cognates)と、日本語のみで使用される非同根語(non-cognates)が存在する。

これまで日本語習得の分野では、同根語・非同根語という単語タイプを操作し、語彙の正誤判断実験は、主に中国語を母語とする日本語学習者を対象に行われてきた(e.g. 早川・玉岡, 2012; 大和・玉岡, 2009; 李, 2022)。その結果、日本語に存在するかどうかにかかわらず、漢字二文字の組み合わせの処理において、聴覚よりも視覚で提示された刺激のほうが正確に処理されることから、L1 中国語の語彙知識は、二字漢字語の認知処理にプラスに働く面があることが示された。その一方で、日中間で共有する同根語より日本語にのみ使用される非同根語のほうが効率的に処理されることから、L1 語彙表象の活性化に起因すると考えられる抑制効果が見られた。つまり、L1 中国語の語彙情報を援用することは必ずしもプラスに働くとは限らず、逆にマイナスに働く面もあることが示された。

一方で、韓国語を母語とする日本語学習者を対象に二字漢字語の処理を調べる研究では、日韓二言語間の形態類似性(または異同)・音韻類似性の効果について多く検討されている(松島, 2013, 2014b; 柳本, 2015, 2016 など)が、同根語と非同根語の処理を見る研究は、管見の限り、松島(2014a)のみである。松島(2014a)では、上級の韓国語母語の日本語学習者における二字漢字語の処理過程を、視覚提示による語彙性判断課題と命名課題を用いてその反応時間を基に検討した。その結果、語彙性判断課題でも命名課題でも、日本語にのみ使用される非同根語より日韓間で共有する同根語のほうが迅速に処理され、L1 韓国語の語彙表象の活性化による促進効果が見られた。また、韓国語を母語とする日本語学習者が日本語の二字漢字語を視覚的に処理する際、L1 韓国語の語彙情報、特に音韻表象を経由することで、単語の処理が促進されることが示唆された。松島(2014a)の実験結果によって、韓国語母語話者による二字漢字語の認知処理過程は、中国語母語話者とは異なる様相を持つ可能性が高いことが示された。

しかし、松島(2014a)には、下記のような課題が残された。

第一に、松島(2014a)では、視覚提示による実験のみ行っており、聴覚提示による実験結果との比較をしていないほか、韓国語を母語とする日本語学習者による聴覚的な処理において、同様の傾向が認められるかについてはまだ明らかにされていない。大和・玉岡・熊・金(2017)では、韓国語を母語とする日本語学習者は日本語における漢字語彙を学習する際、まず日本語の語彙知識が漢字語の読みの理解を促進し、それが書字の理解(書き取り)へ貢献すると報告されていることから、日本語の漢字語における音韻表象の発達が書字表象の発達に先行する可能性がある。そのため、L2 日本語の音韻表象が最初に活性化されると想定できる聴覚提示条件での処理は、書字表象から正誤判断へアクセスしようとする視覚提示条件での処理よりも、韓国語を母語とする日本語学習者にとって容易にできるかもしれない。

第二に、松島(2014a)では、反応時間のみを指標とし、二字漢字語の処理の迅速さについては検討しているが、正答率、つまり、処理の正確さについては分析していない。語彙処理の効率性を分析するためには、迅速さの観点だけでなく、要求された課題に対してどのくらい正しく単語を処理することができるかという正確さの観点も、重要な指標として不可欠であ

ると考えられる。

第三に、松島(2014a)では、日本語に実在する二字漢字語への反応について主に議論されており、日本語に実在しない漢字二文字の組み合わせ、すなわち、正しくないと判断すべき刺激に対する判断における L1 韓国語による影響については、詳細に考察されていない。L2 日本語の書字・音韻情報を持たない漢字二文字の組み合わせを処理する際、L1 韓国語の語彙表象の活性化に影響されるか、もし影響されるとしたら、その特徴は日本語に実在する二字漢字語の処理と同様に見られるかを明らかにすることで、韓国語を母語とする日本語学習者の二字漢字語の処理における L1 韓国語による影響をさらに解明できると考えられる。

以上のように、韓国語を母語とする日本語学習者における二字漢字語の処理において、日本語の語彙知識及び L1 韓国語は重要な要因であるが、それらの影響についてまだ十分に検討されていないのが現状であり、さらに実験を通して検討を重ねる必要がある。

3. 研究課題

以上、概観した先行研究の現状を背景に、本研究では、研究課題を次のように設定する。

① 韓国語を母語とする日本語学習者が二字漢字語を処理する際に、その効率性は日本語の語彙知識の豊富さにどのような影響を受けるか。

② L1 の書字情報と音韻情報が韓国語を母語とする日本語学習者による二字漢字語の処理効率性に影響を与えるか。もし与えるとしたら、それらが促進的に働くか、あるいは、抑制的に働くか。

③ 日本語に実在しない漢字二文字の組み合わせの処理において、日本語に実在する二字漢字語の処理と同じ傾向が見られるか。

以上の 3 つの点について、視覚および聴覚の両方の提示方法による二字漢字語の語彙性判断課題を用いた実験を行い、実証的な観点から考察する。

4. 研究方法

4.1. 被験者

本研究は、韓国語を母語とする日本語学習者 35 名(男性 23 名、女性 12 名)を対象とした。全員が日本に留学しており、平均年齢は 23 歳 6 か月(*SD*=42 か月)で、日本語の平均学習歴は 4.4 年(*SD*=3.0 年)であった。

また、本研究で用いた語彙性判断課題における基準としての数値を求めるため、日本語母語話者 27 名に同様の語彙性判断課題を課した。そのうち、正答率が 90%以下である者や、日本語以外(中国語など)の言語知識が判断に影響していたと申告した被験者 6 名を除外し、残りの 21 名を分析対象とした。全員が日本の大学や大学院に在籍しており、平均年齢は 24 歳 1 か月(*SD*=66 か月)であった。

4.2. 日本語の語彙知識の測定

実験に先立ち、日本語の語彙知識を測定するために、日本語の語彙テスト(宮岡・玉岡・酒井, 2011)を被験者 35 名全員に課した。このテストは 48 問の穴埋めの選択問題で構成され、全般的な日本語の語彙知識を偏りなく問う 1 問 1 点で 48 点満点のテストである。本研究では、全被験者 35 名の平均点 35.86 点(*SD*=7.08)に最も近い整数である 36 点を含む前後 1 点、すなわち 35 点～37 点の被験者 2 名を除外し、38 点より高い得点の被験者 17 名(*M*=42.12、*SD*=2.76)を上位群、34 点より低い得点の被験者 16 名(*M*=29.19、*SD*=3.89)を下位群とした。また、両群の得点の平均値を比較するために *t* 検定を行った結果、日本語の語彙知識に有意な差があることが確認された[$t(31)= -10.7133, p< .001$]。

4.3. 実験方法と材料

本研究では、二字漢字語の認知処理について考察するにあたって、日本語の音読みをする漢字二文字の組み合わせを実験の刺激として全 96 語を準備し、心理学実験ソフトウェア Superlab を使って視覚提示条件と聴覚提示条件の語彙性判断課題を実施した。本実験で刺激として被験者に提示した 96 語のうち、半数の 48 語が正しいと判断すべき実在する日本語の二字漢字語であり、残りの半数が日本語に実在しない、つまり、正しくないと判断すべき刺激である。被験者はそれらの刺激に対し、日本語として正しいかどうかを判断し、所定のボタンをできるだけ速く、正確に押すよう求められる。視覚・聴覚提示による一試行の流れはそれぞれ図 1 と図 2 に示す。

正しいと判断すべき日本語の二字漢字語には、①字体の違いを除いて日韓同形同義の同根語(e.g. 教室)と②日本語にのみ存在する非同根語(e.g. 挨拶)がある。さらに、「日本語教育語彙表」[2)]を用い、初級前半・初級後半・中級前半を「難易度の低い語」、中級後半・上級前半・上級後半を「難易度の高い語」とした。国立国語研究所によって作成された『現代日本語書き言葉均衡コーパス中納言版』(BCCWJ)によると、本研究で「難易度の低い語」として用いた語彙の平均出現頻度は 9,665 回、「難易度の高い語」として用いた語彙の平均出現頻度は 2,248 回であった。すなわち、「難易度の低い語」は「使用頻度の高い語」であり、「難易度の高い語」は「使用頻度の低い語」であると言い換えることができる。

正しいと判断すべき日本語の二字漢字語の選定基準は、以下の通りである。

a.「地震・自信」、「機械・機会」、「動詞・同士」など、複数存在する同じ読み方を持つものを除く。

b.「右折」(中級後半)、「左折」(中級前半)のような、「日本語教育語彙表」に異なるレベルの語彙と表示されているが、難易度が異なると考えにくいものを除く。

c.『NHK 日本語発音アクセント新辞典』を参考に、「書籍」、「気配」など、関東方言でも複数のアクセント型を有する単語を除く。

d.「部活」など略語であるものを除く。

一方で、正しくないと判断すべき漢字二文字の組み合わせには、①韓国語にのみ実在する語 25 セットと②韓国語にも実在しない「非単語」23 セット[3)]があり、以下の基準により選定した。

e.「便紙(편지)→弁士」、「始作(시작)→施策」など、日本語に同じ読み方の異なる単語が存在するものを除く。

f.「學分>学分」、「聲波>声波」のように、被験者に視覚提示する刺激の字体をすべて日本語で最も一般的に使われる形(新字体)にする。

g.刺激音声の作成にあたっては、促音便や連濁の連音変化を考慮に入れる。

実験材料として用いた刺激語および刺激音声の例を論文末に挙げた資料に示す[4)]。

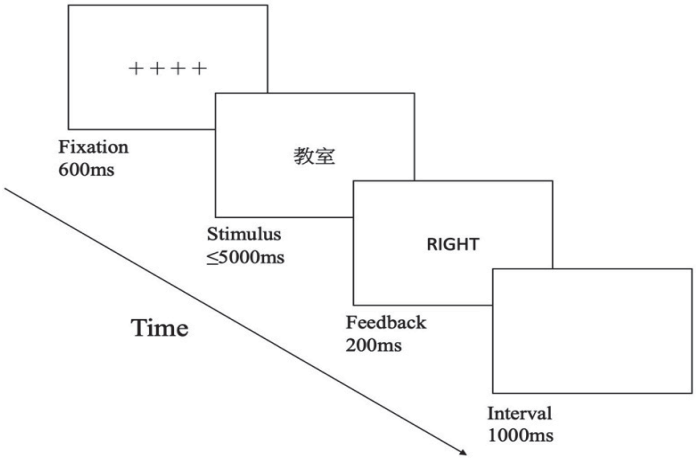

図1 一試行の流れ（視覚提示）

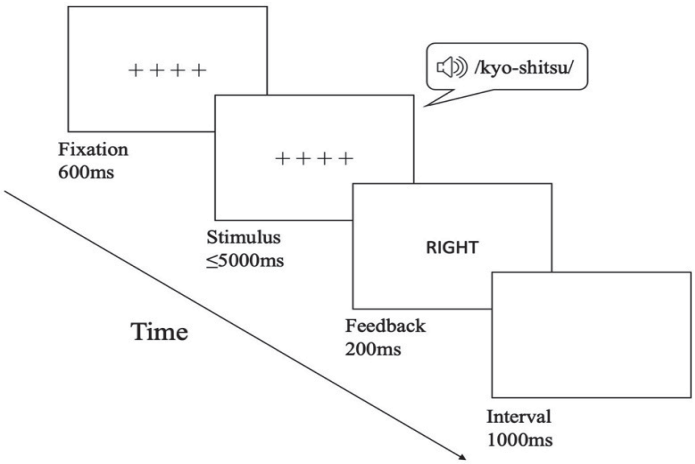

図2 一試行の流れ（聴覚提示）

4.4. 刺激音声の作成

本研究の聴覚提示による実験に使用される日本語の刺激音声の作成にあたっては、関東出身の 20 代の女性日本語母語話者が防音室で自然なスピードで読み上げた音声を録音し、wav ファイルに変換した後、1 語ごとにファイル化した。また、各グループの刺激の音声継続時間をミリ秒単位で計算し、一元配置の分散分析を用いて確認したところ、グループ間の平均値に有意な差は見られなかった[$F(5,90)=2.089$, $p=.074$, *n.s.*]。したがって、各グループの音声継続時間が本研究で行われた聴覚提示による語彙性判断課題に与える影響は等しく、実験によって得られた結果は検討対象となる要因を純粋に反映したものであると言える。

5. 結果と考察

5.1 正しいと判断すべき日本語に実在する二字漢字語の処理

5.1.1 反応時間の観点から

まず、韓国語を母語とする日本語学習者による日本語に実在する二字漢字語の処理を迅速さの点から検討する。反応時間の分析には、正しく判断された項目のみを対象にした。また、各被験者の反応時間の平均値±2.5 標準偏差の範囲外の反応時間を外れ値とし、各被験者の反応時間の平均値±2.5 標準偏差の境界値で置き換えてから分析した。この手続きによって置き換えられた項目は 39 個(1.4%)であった。以上のような手続きを経て得られた正しいと判断すべき語の反応時間を用い、2(グループ:上位群/下位群)×2(提示条件:聴覚/視覚)×2(単語タイプ:同根語/非同根語)×2(使用頻度：高頻度/低頻度)の 4 要因の分散分析(提示条件・単語タイプ・使用頻度の 3 要因は反復測定)を行った。その結果を表 1 に示す。

表1 正しいと判断すべき二字漢字語の処理速度(ミリ秒)

			聴覚提示		視覚提示	
			平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
下位群 (n=16)	同根語	高頻度	995	137	943	297
		低頻度	1,118	160	1,078	334
	非同根語	高頻度	997	125	1,010	325
		低頻度	1,102	213	1,138	353
上位群 (n=17)	同根語	高頻度	861	87	813	142
		低頻度	987	115	979	223
	非同根語	高頻度	889	86	893	174
		低頻度	961	118	925	165
2×2×2×2 分散分析の 主効果と 交互作用	主効果		グループ		$F(1, 31) = 5.120, p < .05$	
			提示条件		$F(1, 31) = 0.244, p = .625$, *n.s.*	
			単語タイプ		$F(1, 31) = 4.182, p < .05$	
			使用頻度		$F(1, 31) = 79.659, p < .001$	
	交互作用		提示条件×単語タイプ		$F(1, 31) = 7.184, p < .05$	
			単語タイプ×使用頻度		$F(1, 31) = 7.291, p < .05$	
			グループ×単語タイプ×使用頻度		$F(1, 31) = 4.320, p < .05$	

注：交互作用は有意水準5%以下で有意なもののみ記載した。

以下では、表 1 に示した正しいと判断すべき語の反応時間に関する分析結果について検討

し、考察を加える。

まず、グループの主効果は有意であった[$F(1, 31) = 5.120, p < .05$]。つまり、日本語の総合的な語彙知識が豊富な上位群は、そうでない下位群より速く日本語の二字漢字語を処理できていることが示された。このことから、中国語母語話者による処理（大和・玉岡, 2009）の結果とは異なり、韓国語母語話者による二字漢字語の処理の迅速さが日本語の語彙知識から影響を受けることがわかった。

次に、提示条件の主効果は認められなかった[$F(1, 31) = 0.244, p = .625$, *n.s.*]。すなわち、日本語の二字漢字語が視覚的に提示されても聴覚的に提示されても、韓国語を母語とする日本語学習者は正誤判断にかかる反応時間は同じ程度であった。しかし、語彙性判断課題において、視覚提示条件では、刺激が画面に表示された瞬間に、その視覚的な情報により語彙表象が速やかに活性化されるため、正誤判断へ素早くたどり着くことが可能である。一方で、聴覚提示条件では、聞こえてきた刺激音声に基づいて最初の音を含む単語候補がすべて活性化されるが、その複数の候補から単語を絞っていくのに経時的な制約を受けるため、視覚的処理に比べて全体的な反応速度が遅くなるのが一般的であると考えられる(McClelland & Elman, 1986, Marslen-Wilson, 1987)。同じ課題に取り組んだ日本語母語話者による処理でも、聴覚的に提示された日本語の二字漢字語より、視覚的に提示された日本語の二字漢字語の方が迅速に処理される傾向が見られた。したがって、韓国語を母語とする日本語学習者による処理に見られたこのような傾向は、迅速さの点において、韓国語を母語とする日本語学習者が二字漢字語を視覚的に処理するのは困難であることを示している。日本語学習者の上位群と下位群の各グループにおける提示条件別の反応時間を図 3 に示す。

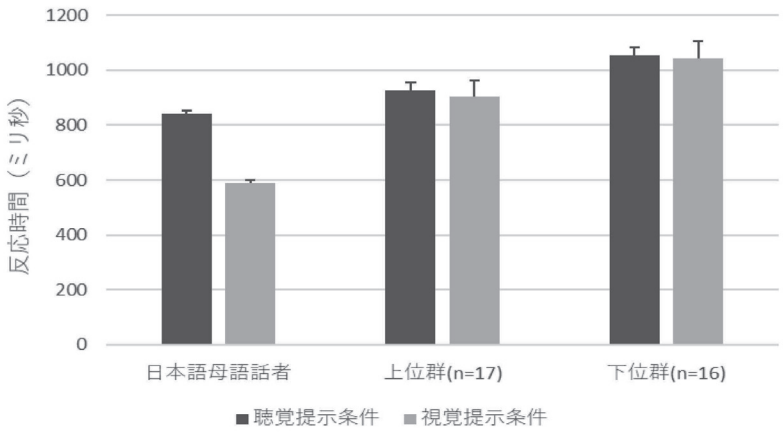

図3 日本語母語話者と上位群・下位群の提示条件別の反応時間の比較

注: 棒グラフの上部に示したのは、標準誤差である。

次に、単語タイプの主効果は有意であった[$F(1, 31) = 4.182, p < .05$]。すなわち、非同根語よ

り同根語の方が迅速に処理されることが示された。この結果は、韓国語母語話者が同根語を処理するのにかかる時間が非同根語より短いことを示した松島(2014a)と同様であった。日韓言語間で共有する同根語の場合、韓国語としても存在するため、韓国語を母語とする日本語学習者は、当該の刺激に対応したL1語彙情報を援用することで、より迅速に判断することができていたと考えられる。一方で、日本語でのみ使用される非同根語の場合は、L1韓国語のメンタルレキシコンに当該の刺激に関する語彙情報が存在しないため、反応が促進されることはなかったと考えられる。また、単語タイプ×使用頻度の交互作用が有意であった [$F(1, 31) = 7.291$ $p < .05$]ことを受けて多重比較を行ったところ、使用頻度が高い(難易度が低い)語の処理においては、同根語と非同根語の反応速度に有意な差が認められた[$F(1, 31) = 14.843$, $p < .001$]のに対し、使用頻度が低い(難易度が高い)語の処理においては、同根語と非同根語の反応速度に有意な差は認められなかった[$F(1, 31) = 0.385$, $p = .539$, *n.s.*]。このような結果が得られた理由として、使用頻度の高い語彙の場合、授業や日常生活などでの頻繁な接触により、当該刺激そのもの及び関連する語彙情報(同根語の場合は当該刺激に対応したL1韓国語の語彙情報を含む)の閾値が低く、想起されやすい状態にある一方で、使用頻度の低い語彙の場合、活性化の閾値が高いため、同根語であっても検索処理するのに時間がかかり、反応速度が遅延していたと考えられる。

最後に、使用頻度の主効果も有意であった[$F(1, 31) = 79.659$, $p < .001$]。つまり、使用頻度が低い(難易度が高い)語彙より使用頻度が高い(難易度が低い)語彙の方が迅速に処理されることが示された。このような傾向は、日本語母語話者でも韓国語を母語とする日本語学習者の上・下位群でも同様に見られた。その使用頻度別の反応時間の比較を図4に示す。

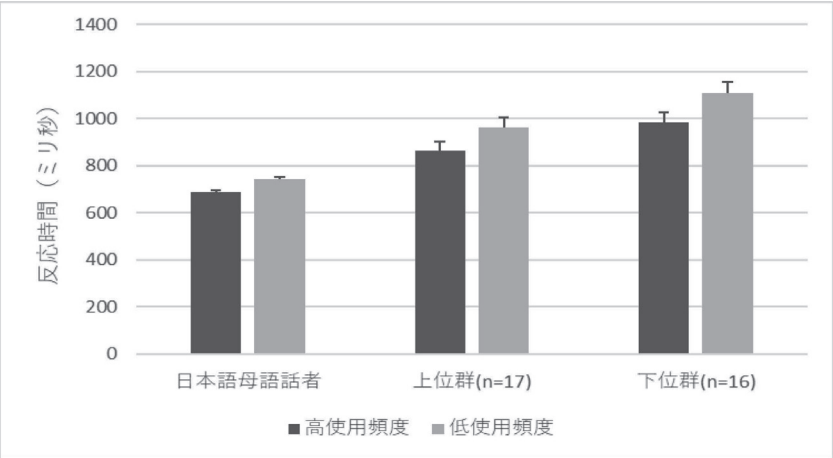

図4 日本語母語話者と上位群・下位群の使用頻度別の反応時間の比較

注: 棒グラフの上部に示したのは、標準誤差である。

図4に示したように、日本語母語話者を含むどのグループにおいても、使用頻度が低い日本

語の二字漢字語に比べ、使用頻度が高い日本語の二字漢字語のほうがより迅速に処理された。このことから、日本語の総合的な語彙知識の豊富さにかかわらず、日本語に実在する二字漢字語の処理の迅速さは、語彙の使用頻度(難易度)に大きく影響を受けることがわかった。

5.1.2 正答率の観点から

次に、日本語に実在し、正しいと判断すべき二字漢字語の処理を正確さの点から検討する。当該の二字漢字語の正答率に関して、2(グループ:上位群/下位群)×2(提示条件:聴覚/視覚)×2(単語タイプ:同根語/非同根語)×2(使用頻度:高頻度/低頻度)の 4 要因の分散分析(提示条件・単語タイプ・使用頻度の 3 要因は反復測定)を行った。その結果を表 2 に示す。

表 2 正しいと判断すべき二字漢字語の正答率(%)

			聴覚提示		視覚提示	
			平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
下位群 (n=16)	同根語	高頻度	92.7%	8.0%	88.5%	9.6%
		低頻度	79.7%	10.5%	68.8%	17.6%
	非同根語	高頻度	88.0%	11.0%	82.3%	12.5%
		低頻度	72.9%	17.4%	59.4%	18.5%
上位群 (n=17)	同根語	高頻度	97.1%	7.2%	93.6%	8.1%
		低頻度	86.8%	9.8%	82.8%	15.4%
	非同根語	高頻度	90.7%	7.7%	85.3%	14.9%
		低頻度	78.9%	14.8%	74.0%	20.8%
2×2×2×2 分散分析の主効果と交互作用	主効果		グループ	$F(1, 31) = 5.669, p < .05$		
			提示条件	$F(1, 31) = 15.190, p < .001$		
			単語タイプ	$F(1, 31) = 52.814, p < .001$		
			使用頻度	$F(1, 31) = 63.676, p < .001$		
	交互作用		なし			

注: 交互作用は有意水準5%以下で有意なもののみ記載した。

以下では、表 2 に示した正しいと判断すべき語の正答率に関する分析結果について検討し、考察を加える。

まず、グループの主効果は有意であった[$F(1, 31) = 5.669, p < .05$]。つまり、日本語の総合的な語彙知識が豊富な上位群は、そうでない下位群より正しく日本語の二字漢字語を処理できていることが示された。

次に、提示条件の主効果も有意であった[$F(1, 31) = 15.190, p < .001$]。すなわち、韓国語母語話者による処理において、視覚的に提示された日本語の二字漢字語より、聴覚的に提示された日本語の二字漢字語のほうが正確に処理されることが示された。これは、視覚提示の場合、語彙が漢字表記で提示され、L2日本語の書字表象に基づいて正誤判断を行うことが求められるため、漢字語であっても表音文字のハングルで表記される韓国語を母語とする日本語学習者は、母語に漢字語の語彙知識が存在するものの、それを援用して判断することが比較的難しいという理由によるものと考えられる。一方で、聴覚提示の場合、音韻的な情報に基づいた語彙処理が求められるため、韓国語を母語とする日本語学習者は、視覚提示の場合に

比べてL1韓国語における漢字語に関する語彙知識を援用しやすく、より正確に判断できていたと考えられる。

さらに、単語タイプの主効果も有意であった[$F(1, 31)= 52.814, p< .001$]。つまり、非同根語より同根語のほうが正しく処理されることが示された。これは、反応時間と同様、韓国語を母語とする日本語学習者は、同根語の場合、提示された刺激に対応したL1韓国語の語彙表象が活性化され、処理の正確さに促進効果を与えるが、非同根語の場合、刺激に対応した語彙表象が存在しないため、同根語が提示された際のように促進効果が生じることはなかったと考えられる。

最後に、使用頻度の主効果も有意であった[$F(1, 31)= 63.676, p< .001$]。つまり、韓国語を母語とする日本語学習者は、使用頻度の高い語を使用頻度の低い語より正しく処理していることが示された。このことから、高頻度語がより効率的に処理されるという傾向は、韓国語を母語とする日本語学習者による二字漢字語の処理の迅速さにのみならず、正確さにも現れることがわかった。

5.2 正しくないと判断すべき日本語に実在しない刺激の処理

5.2.1 反応時間の観点から

次に、日本語に実在せず、正しくないと判断すべき刺激に対して韓国語を母語とする日本語学習者が行う処理を迅速さの点から検討する。日本語に実在する二字漢字語の場合と同様、反応時間の分析には、正しくないと正確に判断された項目のみを対象にした。また、各被験者の反応時間の平均値±2.5 標準偏差の範囲外の反応時間を外れ値とし、各被験者の反応時間の平均値±2.5 標準偏差の境界値で置き換えてから分析した。この手続きによって置き換えられた項目は 104 個(3.6%)であった。以上のような手続きを経て得られた正しくないと判断すべき語の反応時間を用い、2(グループ:上位群/下位群)×2(提示条件:聴覚/視覚)×2(単語タイプ:韓国語にのみ実在する語/韓国語にも実在しない非単語)の 3 要因の分散分析(提示条件・単語タイプの 2 要因は反復測定)を行った。その結果を表 3 に示す。

表3　正しくないと判断すべき刺激の処理速度(ミリ秒)

		聴覚提示		視覚提示	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
下位群	韓国語	1,175	205	1,231	471
(n=16)	非単語	1,212	245	1,232	440
上位群	韓国語	1,119	177	1,089	251
(n=17)	非単語	1,114	186	1,195	299
2×2×2 分散分析の主効果と交互作用	主効果	グループ		$F(1, 31) = 0.907, p= .348$, *n.s.*	
		提示条件		$F(1, 31) = 0.372, p= .547$, *n.s.*	
		単語タイプ		$F(1, 31) = 4.548, p< .05$	
	交互作用	なし			

注：交互作用は有意水準5%以下で有意なもののみ記載した。

以下では、表 3 に示した正しくないと判断すべき刺激の反応時間に関する分析結果について検討し、考察を加える。

まず、グループの主効果は認められなかった [$F(1, 31)= 0.907, p= .348, n.s.$]。つまり、日本語の語彙知識が豊富な上位群とそうではない下位群は同じ程度のスピードで処理をしていた。この結果は日本語に実在する二字漢字語の処理とは異なり、韓国語を母語とする日本語学習者は日本語に実在しない漢字二文字の組み合わせを判断する際、迅速さの点において日本語の語彙知識に影響を受けないことを示している。

次に、提示条件の主効果も認められなかった[$F(1, 31)= 0.372, p= .547, n.s.$]。すなわち、聴覚的な処理は経時的な制約がかかるにもかかわらず、視覚的な処理との反応時間に有意な差がないことが示された。このことから、日本語に実在する語であるかどうかにかかわらず、迅速さの点において、韓国語を母語とする日本語学習者には、漢字二文字の組み合わせを視覚的に処理するのが困難であるという傾向が見られることがわかった。

しかし、単語タイプの主効果は有意であった[$F(1, 31) = 4.548, p< .05$]。つまり、韓国語にも実在しない語に比べて韓国語にのみ実在する語のほうがより迅速に処理されることが示された。このことから、中国語母語話者による処理の特徴と反対に、韓国語母語話者による処理においては、日本語に実在する語であるかどうかにかかわらず、L1語彙表象の活性化が抑制効果を及ぼさず、漢字二文字の組み合わせの処理を促進することがわかった。

5.2.2 正答率の観点から

最後に、正しくないと判断すべき日本語に実在しない刺激の処理を正確さの点から検討する。正しくないと判断すべき刺激の正答率について、2(グループ:上位群/下位群)×2(提示条件:聴覚/視覚)×2(単語タイプ: 韓国語にのみ実在する語/韓国語にも実在しない非単語)の 3 要因の分散分析(提示条件・単語タイプの 2 要因は反復測定)を行った。その結果を表 4 に示す。

表4 正しくないと判断すべき刺激の正答率(%)

		聴覚提示		視覚提示	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
下位群	韓国語	71.50%	11.30%	59.25%	19.82%
(n=16)	非単語	69.29%	16.53%	67.66%	16.80%
上位群	韓国語	81.41%	10.86%	81.18%	10.17%
(n=17)	非単語	87.72%	7.72%	84.14%	11.80%
2×2×2 分散分析の主効果と交互作用	主効果	グループ		$F(1, 31) = 21.517, p< .001$	
		提示条件		$F(1, 31) =5.646, p< .05$	
		単語タイプ		$F(1, 31) = 3.865, p= .058$, *n.s.*	
	交互作用	グループ×提示条件×単語タイプ		$F(1, 31) = 5.828$, $p< .05$	

注: 交互作用は有意水準5%以下で有意なもののみ記載した。

以下では、表 4 に示した正しくないと判断すべき刺激の正答率に関する分析結果について検討し、考察を加える。

まず、グループの主効果は有意であった[$F(1, 31) = 21.517, p < .001$]。つまり、日本語の語彙知識が豊富な上位群の方がそうでない下位群より正確に日本語に実在しない刺激を処理できたことを示している。このことから、韓国語を母語とする日本語学習者による日本語に実在しない漢字二文字の組み合わせの処理において、日本語の語彙知識の豊富さはその迅速さに影響を与えないが、正確さに影響を与えることがわかった。

また、提示条件の主効果も有意であった[$F(1, 31) = 5.646, p < .05$]。すなわち、聴覚的に提示された刺激のほうが視覚的に提示された刺激より正しく処理されたことを示している。このことから、日本語に実在するものであるかどうかにかかわらず、韓国語を母語とする日本語学習者にとって、漢字二文字の組み合わせを聴覚的に処理するほうがより正しくできることがわかった。

しかし、単語タイプの主効果は認められなかった[$F(1, 31) = 3.865, p = .058$, *n.s.*]。つまり、韓国語に実在する語であっても、そうでなくても、韓国語を母語とする日本語学習者は同じ程度の正確さで日本語には存在しないと判断していることを示している。処理の正確さという点においては、日本語に実在する二字漢字語の処理のように、L1 韓国語の語彙表象の活性化による促進効果は見られなかった。

6. まとめ

本研究では、韓国語を母語とする日本語学習者における二字漢字語の認知処理に焦点を当て、聴覚・視覚提示による語彙性判断課題を用い、日本語の語彙知識と L1 による影響について実証的に検討してきた。以下では、本研究で得られた分析結果について述べる。

まず、韓国語を母語とする日本語学習者が二字漢字語を処理する際、視覚・聴覚提示条件にかかわらず、その効率性、すなわち迅速さと正確さともに日本語の語彙知識の豊富さに大きく影響を受けることが示された。また、日本語に実在しない漢字二文字の組み合わせの処理において、日本語の語彙知識の豊富さはその迅速さに影響を与えないが、正確さに影響を与えることが明らかとなった。このような結果は、日本語の習熟度が韓国語を母語とする日本語学習者による二字漢字語の処理に与える影響を検討した松島(2013, 2014b)の実験結果を支持するものである。さらに、このような傾向は視覚的な処理のみならず、聴覚的な処理においても同様に観察されることが本研究で新たに明らかになった。

また、韓国語を母語とする日本語学習者が視覚的に提示された二字漢字語を迅速に処理できなかったこと、また視覚よりも聴覚で提示された二字漢字語のほうを正確に処理していたことから、韓国語を母語とする日本語学習者は、L1 韓国語で漢字語についての語彙知識を持っているものの、日常生活における漢字の使用が限られているため、二字漢字語の判断において、視覚的な処理の困難さが示された。また、このような特徴は日本語に実在する二字漢

字語の処理のみならず、日本語に実在しない漢字二文字の組み合わせの処理においても同様に見られた。

さらに、韓国語を母語とする日本語学習者による二字漢字語の判断において、非同根語よりも同根語のほうが迅速かつ正確に処理され、L1 韓国語の語彙情報の援用による促進効果が観察された。特に使用頻度が高い(難易度が低い)二字漢字語を処理する際、この促進効果がより顕著に現れる傾向が本研究により新たに示された。この結果は、松島(2014a)が示した韓国語を母語とする日本語学習者における二字漢字語の認知プロセスを裏付けるものであり、言語間で書字が一致していなくても同根語効果が起こりうること(Gollan, Forster & Frost, 1997; Hoshino & Kroll, 2008)を改めて実証した。また、このような L1 の語彙情報による促進効果は、日本語に実在しない漢字二文字の組み合わせの処理にも見られた。すなわち、中国語母語話者の語彙処理における L1 語彙表象の活性化による抑制効果(早川・玉岡, 2012; 大和・玉岡, 2009; 李, 2022)は、韓国語母語話者における二字漢字語の処理では観察されなかった。

本研究の実験結果から、韓国語母語話者を対象とした日本語教育への示唆として、以下のことが挙げられよう。

まずは、漢字語の書字指導の重要性である。漢字文化圏に属する韓国語を母語とする日本語学習者は、中国語系学習者と同様に L1 で漢字語彙を多用しているが、表音文字のハングルの使用が一般的である韓国語の環境において、自ら積極的に接触しなかった場合、漢字語の書字的な知識を身につける機会が限られている。韓国語母語話者が日本語の二字漢字語を視覚的に処理するのが困難である背景も、この点に深く関係していると考えられる。したがって、韓国語を母語とする日本語学習者には、二字漢字語を目で見ても効率よく処理できるように、その書字的な知識を記憶に定着させるなどの工夫が大切であろう。

また、日韓語間で共有する同根語の処理に促進効果が見られたことは、別の視点から捉えると、日本語でのみ使用され、韓国語に存在しない非同根語の処理が比較的困難であることが読み取れる。そのため、韓国語を母語とする日本語学習者を対象とした日本語教育の現場では、非同根語の指導に重点を置く必要があると考えられる。

付記

本研究は筆者が大阪大学言語文化研究科へ 2023 年に提出した修士論文の一部を大幅に加筆修正したものであり、その骨子は日本語日本文化教育研究会第 43 回研究発表会において発表した。

参考文献

NHK 放送文化研究所(2016)『日本語発音アクセント辞典』NHK 出版

国立国語研究所(2020)『現代日本語書き言葉均衡コーパス中納言版データバージョン 2021.03』

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>

陳相州(2015)「台湾人日本語学習者の日本語漢字二字熟語処理―単語親密度と学習者の語彙力による影響」『台湾日語教育学報』25, 287-315.

松島弘枝(2013)「漢字と語彙の習熟度が異なる韓国人日本語学習者における日本語漢字単語の処理過程―2 字単語の形態・音韻類似性を操作した読み上げ課題による検討―」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』62, 281-290.

松島弘枝(2014a)「韓国人日本語学習者における日本語漢字単語の視覚的認知―韓日 2 言語間の同根語と非同根語の処理過程―」『留学生教育』19, 23-32.

松島弘枝(2014b)「漢字と語彙の習熟度が異なる韓国人日本語学習者における日本語漢字単語の処理過程(2)―2 字単語の形態・音韻類似性を操作した語彙判断課題による検討―」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』62, 281-290.

早川杏子・玉岡賀津雄(2012)「中国人・韓国人日本語学習者による聴覚・視覚提示の言語間同形義・言語間異形同義の二字漢字語の処理」『小出記念日本語教育論集』20, 17-32.

朴善娟・熊可欣・玉岡賀津雄(2014)「同形二字漢字語の品詞性に関する日韓中データベース」『ことばの科学』27, 53-111.

宮岡弥生・玉岡賀津雄・酒井弘(2011)「日本語語彙テストの開発と信頼性－中国語を母語とする日本語学習者のデータによるテスト評価－」『広島経済大学紀要』34(1), 1-18.

柳本大地(2015)「日本留学中の韓国人日本語学習者における日本語漢字単語の聴覚的認知－韓日 2 言語間の形態異同性と音韻類似性を操作した実験的検討－」『留学生教育』20, 9-17

柳本大地(2016)「韓国国内の韓国人上級日本語学習者における日本語漢字単語の聴覚的認知－韓日 2 言語間の形態異同性と音韻類似性を操作した実験的検討－」『総合学術学会誌』15, 21-28

大和祐子・玉岡賀津雄(2009)「中国人日本語学習者の日本語漢字語の処理における母語の影響」『ことばの科学』22, 117-135.

大和祐子・玉岡賀津雄・熊可欣・金志宣(2017)「韓国人学習者の語彙知識と漢字の読み書き能力との因果関係の検討」『ことばの科学』31, 39-58.

李煥然(2022)「中国語を母語とする日本語学習者における二字漢字語の認知処理－日本語の語彙知識及び L1 による影響に着目して－」『日本語・日本文化研究』32, 239-253.

Anderson, J. R. (1990) *Cognitive psychology and its implication*s, 3rd ed. Freeman, New York.

Gollan, T. H., Forster, K. I., & Frost, R. (1997) Translation priming with different scripts: Masked priming with cognates and noncognates in Hebrew–English bilinguals. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 23(5), 1122–1139.

Hoshino, N., & Kroll, J. F. (2008) Cognate effects in picture naming: Does cross-language activation survive a change of script? *Cognition, 106*(1), 501–511.

남기탁(2015)『韓中日공용한자 808 자(韓中日共用漢字 808 字)』한국어문교육연구회

注

1) 活性化(activation)とは、長期記憶内の情報が今すぐ利用可能であるような特殊な状態に変換されることである。(Anderson, 1990)
2) http://jhlee.sakura.ne.jp/JEV/より閲覧することができる。この語彙表は、17921 項目の見出し語から構成されている。各見出し語には、日本語教師の主観判定に基づき、初級前半から上級後半と 6 段階の難易度が記載されている。
3) 刺激選択の段階では「韓国語にのみ実在する語」と「非単語」を 24 セットずつ作成したが、「非単語」に入る刺激の中に韓国語に存在する単語が 1 つ混入していることが実験開始後に判明したため、当該の刺激を「非単語」から除外し、「韓国語にのみ実在する語」として扱うことにした。
4) 下の資料において、アスタリスクが付いているものは、促音便や連濁の連音変化が起こると想定できるものである。

【資料】

実験で用いた正しいと判断すべき日本語に実在する二字漢字語の例

	日韓同形同義の同根語	日本語にのみ存在する非同根語
低難易度	教室(キョウシツ) 地図(チズ) 鉛筆(エンピツ)	挨拶(アイサツ) 立派(リッパ) 自分(ジブン)
高難易度	連続(レンゾク) 利益(リエキ) 失業(シツギョウ)	頂戴(チョウダイ) 油断(ユダン) 退屈(タイクツ)

実験で用いた正しくないと判断すべき日本語に実在しない刺激の例

韓国語にのみ実在する語	韓国語にも実在しない非単語
惹端(ジャクタン) 手票(シュヒョウ) 約婚(ヤッコン)*	在活(ザイカツ) 列得(レットク)* 部論(ブロン)